

私の履歴書

「ファインブランキングと私」

第一回

林 一 雄

はじめに

2006年11月に村川正夫博士を会長としてFB技術研究会は発足して筆者は事務局長を担当することになり、創立1周年記念の国際FBセミナーには、FBを発明したシーズさんのお孫さんを迎えて会員たちと交流し、2010年春には会員たちが経験を持ち寄ってこれまでに無い“ファインブランキングハンドブック”を刊行した。

その後会員からホームページにFB関連の人との交わりを写真を添えた「私の履歴書」を書くようにと言われたので引き受けた。

1. ドイツ語とFBの縁

都立井草高等学校時代には機械体操部、旅行、スキーと青春を謳歌し、浪人して国・公立を受検しようと考えていた。1年間浪人しても無理だと先生から言われたので、私大を数校受検して授業料免除なので父親が勤務する明治大学の工学部機械工学科に入学し、互いに都合が悪いので卒業までは教授の息子であることは隠し通した。

第1外国語にドイツ語受講した理由は、祖父が1904年からヨーロッパに滞在して“異人”さんと撮影した写真を見ていたので、筆者も金髪で青い目のガールフレンドを持つと夢を描いていたからである。

しかし、授業が始まったら獨協高校でドイツ語を学んできた彼らと初めてドイツ語を学ぶ筆者とでは大きな学力差があった。



(図1) 1905年にロンドンに滞在した祖父、林冀一とガールフレンド

そんなある日、教授の部屋を訪ねたところ先客が長居をしていたので待っている間書架にあった英独・独英辞典をめくっていたら、ドイツ語のdで始まる単語の幾つかを英語ではthと書き、vはfに置き替わっていることをみつけた。

例えば、danken=thank、Vater=fatherなどで、辞書を1ヶ月借りて英語・ドイツ語・日本語と並べ自分用の辞書を作った。

これが50年後に「英・独・日・韓・中、ファインブランキング用語辞典」を上梓する礎になった。

筆者がドイツ語で苦勞していると知った父が、自分が武蔵高等学校時代に世話になったコルネリア・カナコギ夫人がドイツ語で綴った孫娘との北海道旅行記をくれたので辞書を片手に一週間で読み終えた。



(図2) コルネリア・カナコギ夫人と孫娘

知識欲の旺盛な仲間と、機械学会などの講演会や他の大学の授業も聴講し、筆者は1959年に機械い5学会主催の講演会で40才ほどの助教授であった前田禎三先生の「材料のプレス加工性と製品精度」を聞いてからプレス加工に興味を持ち、前田先生の許可を得て入学はできなかった東京大学で聴講することになった。



(図3) 前田禎三先生

2. 工藤先生との縁

ある日、前田先生から「ヨーロッパで塑性加工を勉強した先輩の帰国報告会に参加したらいい」と誘われた。工藤英明先生は帝国大学卒業後は機械試験所に在籍する筆者より15才年長の学者であった。

話の中に“精密打抜き”の紹介があり厚さ3~5mmの金属を滑らかにせん断したサンプルが回覧されたので数日間それを借りて詳しく観察した写真をした。

翌日、能率機械製作所の大木重吉社長を訪ねたら「この加工に使うプレスは将来普及する」と言い、前田先生は外国の文献を

見たことを思い出して、1957年に書かれた Untersuchung des Schneidvorganges bei Blech. という文献をくれた。



(図4) 工藤英明先生

以来、筆者も興味深い文献は保存する癖になり多量のファイルが溜めた。

3. アルバイト

工藤先生にサンプルを返しに行き、前田先生がくれた文献の訳に目を通して貰ったら「この日本語ではだめだ、ドイツ語を学ぶなら貿易会社でアルバイトしないか」と海外通商を紹介され、晴海で開催される工作機械見本市で通訳をすることになった。

アルバイト貰ったお金で、1909年に Cassel 社、1929年に Langenscheidt 社、1933年に Otto Spamer 社などで出版した独英・英独辞典を購入した。

これらの辞書では昔ドイツで使ったフラクトゥーア (Fraktur) と呼ぶ活字を使っていたのでこの文字も覚えることになった。

しばらくすると海外通商から卒業したら入社しないかと誘われ、手続きに総務部長を訪ねたら「社長は工藤先生のお父上で、先生の奥さまの旧姓は林と言うが貴方は親戚ですか」と尋ねられ、他人だと答えた。



(図5) 海外通商の工藤社長

会社で毎週2日、工業英語、精密機械概要の講義を受けていたら社長から「倅がスイスやドイツなどに留学したが、君もスイスにある親会社のUHAG社と日本総領事館で訪問者のアテンドなどを手伝わないか。日本の会社に入社して、日本流の新入社員教

育を受けるよりヨーロッパで新人教育を受けて国際的な人間になったら良い。そして理工系の方は語学が不得手な人が多いので英語とドイツ語を磨き、さらにZuerich工科大学で聴講してヨーロッパに沢山の友人を作って帰国するように」と言われたので、その提案に従うことにした。

4. スイスへの旅立ち

大学では「自動車の防振」を卒業論文のテーマとした。仲間の中山尚三君は豊田自動織機に入社し2001年には副社長となり、和田卯生君は日産自動車の調達部長、大亦絢一郎君は明治大学の教授となった。

彼らのお陰で卒業論文の完成の目鼻がついた2月下旬に筆者は海外通商の社員旅行でスキーに参加させて貰った。

筆者のスキー歴は、昭和の初期に誕生したシーヨードラーという会で元・大蔵大臣の愛知揆一さんなどから仕込まれ、東京女子大のスキー同好会の指導経験もあり腕前は確かなはずだったが右腕を骨折した。

卒業したらすぐにスイスに出発する予定が延期となり、社長から国内の著名な会社に挨拶回りをするように提案された。

池貝鉄工では長瀬恒久取締役が筆者の伯父の林守雄と東京大学で同級生だったと歓迎し、技術部の和泉忠美さんと呼んでくれた。和泉さんは後にソディックの社長となった人で、彼は東京工業大学で筆者の父から機構学を学んだそうで、筆者には放電加工について長年指導してくれた。

大隈鉄工では、初代文化勲章受章者の、長岡半太郎博士のご子息の長岡振吉取締役から、円筒研削の講義して頂いた。それが縁となり同社が初めてヨーロッパに輸出したときには微力ながら協力させて頂いた。

唐津鉄工では竹尾年助氏と共に同じ村を出て同社の創業に加わった筆者の親戚の林政吉取締役から歯切盤本体を鑄造することがいかに大切か説明を受けた。

そして、最後の訪問先の三菱長崎造船では池田半治常務がドックを案内した後に老舗で眺めの良い富貴楼に招待してくれた。

この挨拶旅行で、筆者は父の人脈を有り難く思うと同時にできるだけ早く自分の人脈と作ろうと心に誓った。

1962年6月9日に会社の先輩、家族や友人が見送りに来てくれスイスに旅立った。

5. スイスとドイツで違うドイツ語

Zuerichでは人の話がスイス訛りが強いいため約80%は解らなかったもので、ドイツのGoethe Institutに入学した。同校には世界各国の若者がいてドイツ、スイス、オー

ストリアなどにある各国の大使館、領事館、銀行などに在籍するエリートや王侯貴族族の子供たちもいた。



(図 6) 1962 年、羽田からスイスに出発

6. FBを発明したSchiessさん

ドイツ語の特訓を終えてスイスに戻ると日本総領事館のDr. Scheppachから「大きな声で、はっきり、ゆっくり、上品な単語を選び、話すように」と厳しく躓けられた。

Dr. Scheppachが休憩時間に「工藤先生を大学やFBを発明したSchiess社に案内した」と話したので、筆者にもSchiess社の訪問を頼み翌週にはSchiess社長との面会が実現した。

訪問日の直前に 83 才の誕生日を祝ったばかりのSchiess社長は 40 年前に発明したFBを説明し自ら工場を案内してくれた。



(図 7) Schiessさん一家 4 世代、
前列右端:Schiess社長

その日、Schiess社長にプレスを日本で販売させて欲しいと頼んだが「自社で使うために造ったFBプレスと金型なので販売しない」と断られた。理由を尋ねると「人に使ってもらうには技術指導が必要で、また多目的に使うには改造が必要」と答えた。

しかし、帰り間際にSchiess社長は同社を退社してHydrel社、Schmid社などで働いている人に相談すれば輸出するかも知れないと連絡先を書いてくれた。

シースさんの話したスイスの方言では、「今日は」を“Gruezi”と言い、ドイツ語の“Guten Tag”とは全く違う。スイス人と話すのに必要なスイスの方言を勉強する

学校はないのでDr. WeberとDr. Baechtildが編纂したZuericherdeutsch語辞典を買って勉強した。

7. ETH

当時ETH(Eidgenoessische Technische Hochschule Zuerich=チューリッヒ工科大学)には明治大学の先輩の室井明さんがいた。彼は三菱重工製のシルバーピジョンと言うスクーターで通学していた。また、筆者がスイスに到着した直後に東京工業大学で清家清先生の研究室で建築を専攻した村口昌之さんが入学した。

Zuerichには約 50 人の邦人が駐在していたが、その中には 1956 年に東京大学工学部を卒業し安川電機からBBC社に派遣された楠田喜宏さん、1958年に東京大学工学部を卒業し三菱重工を経てBBC社の流体研究所に在籍し、後にドイツ自動車工業会の日本代表となった三村道夫さんなどもいた。



(図 8) Zuerichの仲間(左から筆者・三村・楠田・村口・村口夫人)

村口さんは帰国して、北海道旅行記に登場したカナコギ夫人のお孫さんと結婚し、1970年に大阪万博のスイス館、日本工業大学の「N. I. T/Yamamotoファインブランキングセンター」などを設計した。



(図 9) 村口さんが設計し 2004 年 1 月に完成した「N. I. T/Yamamotoファインブランキングセンター」

8. スイス料理

まもなくするとスイスの代表的な企業の案内なら可能となり、9 月には初めて三菱造船の池田常務をBBC社に案内し、三村さんの説明でFBプレスの稼働してい

るところを一緒に見学した。池田さんには長崎でご馳走になったのでZum Rueden (猟犬の家)と呼ばれる1348年に建設された由緒のあるレストランでZuerich名物の“Geschnitzel mit Roesti”と呼ばれる子牛のクリーム煮をご馳走した。

これが縁で外食ばかりしていた筆者は自炊する決心をし、かつてGoeteが住んだ“Goethe Stube”と言うレストランのシェフからこの料理を伝授して貰った。

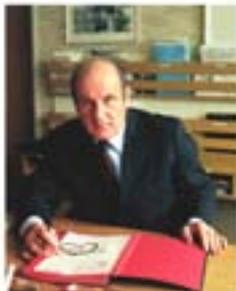
後に週刊サンケイの「男の自慢料理」のグラビアページで紹介され、江上料理学院・江上院長に誉められたのが(写真10)の“Geschnitzel mit Roesti”である。



(図10) 週刊サンケイ「男の自慢料理」

9. マイプレス

1963年7月23日、鈴木自動車生産本部の鈴木修部長(現・会長)を三菱と旋盤の技術提携を締結した工作機械メーカーのOerlikon社に案内したところ、May pressの考案者であるDr. MayがOerlikon社に製造を委託したFBプレスの試運転をしているところに遭遇し、博士にSchmid社にプレスを納入した後も見学できるように手配してもらった。



(図11) Schmid社長

Schmid社長と親しくなり、10月に工藤先生の紹介で機械試験所の窪田雅男部長が訪ねてきた時にはSchmid社に案内した。

窪田部長は「FBだけに夢中にならず、高速プレス、シェービングプレスなど広く、

かつ偏りなく勉強し、機械試験所の松野建一先生、中村虔一先生などと情報交換をするように」と助言してくれた。

1963年12月12日に、筆者は山間の凍結した路面で滑って、頭金を払っただけのKarmann Ghiaを修理ができないほどに大破し左足を骨折して国立病院に入院した。

病院では念願の金髪で青い目の女医さんの卵と親しくなったが、残念ながら単なる患者と医者との範囲を超えずに終わった。



(写真12) 車を買ったが・・・

1964年4月、貿易商社の江商の大林礼三さんからブラザー工業の浅見和也課長とOsterwalder社へ行くので筆者に通訳として来るように連絡があった。礼三さんの兄の一三さんには筆者の姉が嫁いでいた。

Osterwalder社は鋳物工場を持つ鍛造プレスのメーカーで、FBの必要な動きに適していることから、それを改造した機械式FBプレスを発売したばかりであった。

同社の工場の一部をFeintool社が借りていて金型の仕上げ調整を指導してくれた。

その時、試運転したFBプレスは日本に初めて輸出されブラザーで1ジグザグミシンのカムを生産することになった。



(図13) 初めて輸入したFBプレスで生産したブラザー工業のミシンのカム

10. スイスのお嬢さんと・・・

昔から外国語の勉強にはガールフレンドを持つのが早道だと言われていた。その言い伝えを忠実に守り、スイスの若い人が日

本語の教師を求めてチューリッヒ在留邦人会を訪れると、筆者達が無料奉仕で日本語/ドイツ語の交換教授をした。こうして筆者も祖父と同様に“個人外交”を始めた。



(図 14) お嬢さんと“個人外交”

1964年の5月中旬に日本から帰国しろと連絡が来たので、帰国する前に少し専門知識を学び、現場経験も身につけたいので半年の延長を申請し許可を貰い“個人外交”は中断することになった。

当時、Schmid社ではドイツのSMG社製の油圧プレスにFBプレスに改造していたので研修兼手伝いとして置いて貰い、7月の夏期休暇前までに改造が完成したら、10月に東京で開催される工作機械見本市にそのFBプレスを展出すると約束を取り付けた。

Schmid社ではFBのことをドイツ語のFeinstanzen またはFeinschneiden、英語ではFineblankingと言わず、Precision Stampingと言っていた。

Schmid社でのSMG社製のプレスの改造は筆者の手伝いが役に立たなかったからだけでなく、オリジナルプレスのラムのストローク長さが必要以上に長く、せん断速度も速すぎ、さらに板押さえまた逆板押さえなどを単独に無段階で制御する油圧装置の開発に手間取り見本市の展出を諦めた。

11. Bruderer高速プレス

帰国してからFBを担当することを夢に描いていたが予定が狂った筆者を、誕生したばかりのBruderer社が実習に呼んでくれ、時代の要求に合わせた小型高速プレスの組立現場で実習して、出来立ての高速プレスを東京の見本市に展出することになった。

こうして1964年10月24日東京オリンピックの閉会式当日の夕刻、スイス流の社会人教育を終えた筆者は羽田空港に戻り海外通商に復職した。

機械試験所の工藤先生に帰国の挨拶に行き、窪田部長、松野先生、中村先生などに

も会った。工藤先生は田村公男先生と丸棒のせん断実験を行っているところで固定刃と移動刃とのクリアランスおよび切り口面の状態を調べていた。

帰国して最初の仕事は、第2回工作機械見本市にBruderer社製のBSTA-18型、3本柱式高速プレスの初出展であった。

初日に日刊工業新聞の取材を受けた。出版局には同年齢の井戸潔さんがいて「プレス技術」、「機械技術」などの編集部の人数約100人との交流が始まった。

12. 日協製作所

見本市が始まって第2日目の午後、筆者は製品が金型から排出されていないことに気付かずにプレスを運転しパンチを欠いてしまった。閉館まで待って金型を分解し、松戸市の日協製作所の海老島照彦常務と瀬戸郁夫氏を訪問し助けて貰うことにした。

落ち込んだ筆者を励まそうと海老島さんが市川の白藤という料亭でご馳走してくれ「明日の昼までには、会場に届けるから安心なさい」と帰宅させてくれた。

翌日江商が展出しているOsterwalder社製のFBプレスを見学した。日本で初めて動いているFBプレスの前に人々は釘付けとなり、平滑にせん断されたサンプルだけでなくV字型の溝が付いたスケルトンまで持ち帰るのを見るのは悔しかった。

見本市では服部時計店工場精工舎の服部正次という人が来た。名刺を見たが所属部署も肩書きも無い人であったが、「見本市が終わったらこのプレスを届けるように」といって帰っていった。

急いで上司に伝えたら「服部社長だ!」とかなり慌てて会場を探したが見つからなかった。これが筆者にとって生まれて初めての商売であった。

こうして1964年の秋から、25才の新人セールスエンジニアとしての生活が始まったが、筆者の担当はスイス製の高額プレスなので訪問先は上場会社または非上場でも大手企業が多く、会う人は部長または取締役が多かったが、ドイツ語は嫌われたので翻訳することにした。

翌1965年6月、神奈川県座間市に東洋精密プレス工業が創立し100トンから400トンまで10台のFBプレスを使ってFB部品の受託加工を開始した。

13. 予想外の人生

1966年4月に26才で結婚することになった。相手は学生時代に知り合った神戸薬科大学を卒業した旅行好きな雅子である。



(写真 15) 1966 年、椿山荘で結婚

仕事で関西に行く機会があったので電話したら夕食に彼女は兄さんを連れてきた。海産物の珍味業者の娘で、気心があったので何度か彼女と会っていたら、見合いの話しが来たと言うのでプロポーズした。

仲間は「外国人か、きっと派手な女性と結婚」を期待していたが「予想外な地味な女性」と驚き「長くは続かないかも・・・」と噂したそうであるが雅子は「私が我慢してきたから・・・」だと言っている。

結婚した頃の筆者は体重 49kg のスマートと言うよりも華奢であったが、雅子の料理食事を食べていたら体重が 65kg を超え、回りの人達から「太るよりも子供を作れ」と言われ、筆者なりに子作りに励んだ結果、結婚から 4 年目の 1970 年に長男が誕生、それから流産・早産などの後に二人目の息子を授かった。女の子ばかり授かった友人から肉食中心にしたら娘が生まれると言われたので助言に従ったが次も息子だった。

当時日本では、大阪機工が ESSA 社と技術提携で FB プレスを国産化し、純粋な国産では會田鉄工などがあり、1966 年秋の工作機械見本市には三井三池製作所が技術提携で国産化した Hydrel 社の HFP-63 を千代田機械貿易が出品し、各社で FB を紹介することになった。